

平成 27 年度「特別支援教育に関する実践研究充実事業
(特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究)」報告書

団体名	上越教育大学
研究開始年度	平成26年度

I 概要

1 指定校の一覧

設置者	学校種	障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
十日町市	特別支援学校	知的障害	<small>とおかまちしりつ</small> 十日町市立ふれあいの丘支援学校 <small>おかしえんがっこう</small>

2 研究テーマ

小学校との交流及び共同学習を推進する授業づくりを基礎にした特別支援学校の教育課程に関する実践研究

3 研究の概要

対象校となる十日町市立ふれあいの丘支援学校 (以下、支援学校) は、市立十日町小学校 (以下、小学校) に併設されている。本研究では、学校コンサルテーションに基づく授業の実践と評価、小学校との交流及び共同学習の観察と分析、教育課程の評価と改善を行った。

まず、学校コンサルテーションに基づく授業実践では、これまで児童生徒一人一人がわかって動ける授業づくりと教師の実践的指導力の向上をテーマに研修を重ね、児童生徒が主体的に学習に取り組んでいる姿が見られた。特別支援教育セミナーにおいても、いくつかの事例を取り上げ、児童生徒が主体的に学習に取り組むための検討が行われた。その結果、大勢の中でも自ら活動できるようになり、交流・共同学習の基盤となる主体的な行動がとれるようになったと考える。

次に、学校行事や縦割り班活動、給食などでの交流及び共同学習について、授業観察と分析を行った。また、合同で実施される「城ヶ丘ふれあいカーニバル (運動会)」「城ヶ丘ふれあいフェスティバル (文化祭)」の学校行事と「城ヶ丘3施設ビッグフェスタ」に向けての事前学習を中心に授業観察と分析を行った。縦割り班での応援合戦や小学校4年生との合同による綱引き、手話付きの歌と巨大アートの作品作り、ビッグフェスタの看板作りや飾りの制作などが共同で行われていることが観察できた。校長先生や小学生の感想にもあるように、計画の段階から支援学校の児童生徒とどうしたら一緒にできるかを絶えず考えていることが分かった。

交流及び共同学習を進める教育課程編成や日々の授業での課題等について、授業観察や学校評価等に基づいて、年度当初より両校の教員が綿密な打合せを行い、教員同士も交流し、保護者の意見等も吸い上げ、計画・実施し、反省し、次年度改善していく PDSA の循環がしっかりとできていることが明らかとなった。教育内容についても、キャリア・エデュケーションの観点を加味して、連続性・継続性のある教育課程編成につながる実践研究の充実を図ることができた。

4 研究の成果

最も大きな成果は、単に支援学校と小学校が併設されているという施設環境が大きく作用しているだけではなく、その環境を生かし切るための両校の教育課程における計画的な学校行事を通じた交流及び共同学習とその事前学習が、両校の先生方や児童生徒によって成し遂げられているという点を明らかにできたことである。

また、支援学校においては、児童生徒一人一人がわかって動ける授業づくりと教師の実践的指導力の向上を図り、児童生徒が授業において主体的に学習に取り組んでいけるようにすることが、大勢の中でも自ら活動できるようになり、交流及び共同学習においても主体的な行動がとれるようになったことにつながっていたことも明らかになった。

教育課程編成については、日々の授業の観察や学校評価等に基づいて、保護者の意見等も吸い上げ、計画・実施し、反省し、次年度改善していく PDSA の循環がしっかりとできていることが明らかとなった。また、重複学級における自立活動を主とした内容から、小学部での遊びや生活単元学習、図工や音楽での経験を広げる内容、中学部では生徒が主体的に取り組む作業学習へとつなげ、キャリア・エデュケーションの観点を加味して、連続性・継続性のある教育課程編成に結びつく実践研究の充実を図ることができた。

5 課題と今後の方策

今後、さらに充実した交流及び共同学習の実践を推進するためには、日々の授業と交流行事などの事前・事後指導を組織的、計画的に関連させながら行うことが課題である。学校としての交流行事が3回、地域との交流行事も6回あり、その行事にむけて、事前・事後指導と日常の授業をどう関連づけ、整理していくか、検討が必要である。また、週に1回のみのおそびや生活単元学習、自立活動等の授業では、単発的な展開になりやすい。そのため、次回の授業を楽しみにしている児童生徒もいるが、個々の児童生徒の課題が十分に明確になっているとはいえず、今後さらに、個々の目標を具体化し、その目標を達成できるような授業づくりが必要である。

また、重複学級の児童生徒と普通学級の児童生徒との実態が大きく異なるなかで、合同で授業を行っている場面もある。重複学級の児童生徒の実態や体調等を考慮して、次第に大きな集団と一緒に活動できるようにしていくことも課題である。中学部では、日常的な交流の相手が小学生であり、小学生に作業内容を教えたりする場面も設定しているが、同年代の生徒との交流や卒業後の新潟県立小出特別支援学校川西分校（高等部）との連携をさらに進めていくことも課題である。

キャリア・エデュケーションの観点を加味して、連続性・継続性のある教育課程編成について検討を進めているところであるので、さらに、卒業後の姿を目標とし、また、逆に、小学部段階ではどうあったらよいかを明確にし、児童生徒一人一人がわかって動ける授業づくりを充実することによって、授業改善を図ることができるとよい。